武蔵野日曜聖書講筵

パウロのエペソ伝道
――使徒行伝第19章8～41節――

１９９１年11月10日
小池辰雄

エペソ伝道　使徒的信交　御意に従う　キリストの聖力によって　大女神アルテミス　本ものか　他宗排撃はいかん　愛の使徒賀川豊彦

【使徒19】

8ここにパウロ会堂に入りて、三个月のあいだ臆せずして神の国に就きて論じ、かつ勧めたり。9然るに或者ども頑固になりて従わず、会衆の前に神の道を譏りたれば、パウロ彼らを離れ、弟子たちをも退かしめ、日毎にツラノの講堂にて論ず。10斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。11而して神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。12即ち人々かれの身よりあるいは手拭あるいは前垂をとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり。13ここに諸国遍歴の呪文師なるユダヤ人数人あり、試みに悪霊に憑かれたる者に対して、主イエスの名を呼びて『われパウロの宣ぶるイエスによりて、汝らに命ず』と言えり。14斯なせる者の中に、ユダヤの祭司長スケワの七人の子もありき。15悪霊こたえて言う『われイエスを知り、又パウロを知る。然れど汝らは誰ぞ』16斯て悪霊の入りたる人、かれらに跳びかかりて二人に勝ち、これを打拉ぎたれば、彼ら裸体になり傷を受けて其の家を逃げ出でたり。17此の事エペソに住む凡てのユダヤ人とギリシヤ人とに知れたれば、懼彼ら一同のあいだに生じ、主イエスの名崇められる。18信者となりし者おおく来り、懺悔して自らの行為を告ぐ。19また魔術を行いし多くの者ども、その書物を持ちきたり、衆人の前にて焚きたるが、其の価を算うれば銀五万ほどなりき。20主の言、大いに弘りて権力を得しこと斯の如し。

21此等の事のありし後パウロ、マケドニヤ、アカヤを経てエルサレムに往かんと心を決めて言う『われ彼処に到りてのち必ずロマをも見るべし』22斯て己に事うる者の中にてテモテとエラストとの二人をマケドニヤに遣し、自己はアジヤに暫く留まる。

23その頃この道に就きて一方ならぬ騒擾おこれり。24デメテリオと云う銀細

工人ありしが、アルテミスの銀の小宮を造りて細工人らに多くの業を得させたり。25それらの者および同じ類の職業者を集めて言う『人々よ、われらが此の業に頼りて利益を得ることは、汝らの知る所なり。26然るに、かのパウロは手にて造れる物は神にあらずと云いて、唯にエペソのみならず、殆ど全アジヤにわたり、多くの人々を説き勧めて惑したり、これ亦なんじらの見聞する所なり。27斯てはただに我らの職業の軽しめらるる恐れあるのみならず、また大女神アルテミスの宮も蔑せられ、全アジヤ、全世界のおがむ大女神の稜威も滅ぶるに至らん』28彼等これを聞きて憤恚に満たされ、叫びて言う『大いなる哉、エペソ人のアルテミス』29斯て町挙りて騒ぎ立ち、人々パウロの同行者なるマケドニヤ人ガイオとアリスタルコとを捕え、心を一つにして劇場に押入りたり。30パウロ集民のなかに入らんと為たれど、弟子たち許さず。31又アジヤの祭の司のうちの或者どもも彼と親しかりしかば、人を遣して劇場に入らぬようにと勧めたり。32ここに会衆おおいに乱れ、大方はその何のために集りたるかを知らずして、或者はこの事を、或者はかの事を叫びたり。33遂に群衆の或者ども、ユダヤ人の推し出したるアレキサンデルに勧めたれば、かれ手を揺して集民に弁明をなさんとすれど、34其のユダヤ人たるを知り、みな同音に『おおいなる哉、エペソ人のアルテミス』と呼ばわりて二時間ばかりに及ぶ。35時に書記役、群衆を鎮めおきて言う『さてエペソ人よ、誰かエペソの町が大女神アルテミス及び天より降りし像の宮守なることを知らざる者あらんや。36これは言い消し難いことなれば、汝ら静かなるべし、妄なる事を為すべからず。37この人々は宮の物を盗む者にもあらず、我らの女神を謗る者にもあらず、然るに汝ら之を曳き来れり。38もしデメテリオ及び偕における細工人ら、人に就きて訴うるべき事あらば、裁判の日あり、かつ司あり、彼等おのおの訴うべし。39もし又ほかの事につきて議する所あらば正式の議会にて決すべし。40我ら今日の騒擾につきては何の理由もなきにより咎を受くる恐れあり。この会合につきて言いひらくこと能わねばなり』41斯く言いて集会を散じたり。

●エペソ伝道

エペソの少し先にパトモス島がある。エペソは、パウロの後でヨハネが長いこと居て、ここからパトモスに流された。黙示録に「アジヤに在る七つの教会」とある。あの「七つの教会」は、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤです。この小アジヤ半島の七つの教会のうちで一番大きいのが、このエペソです。ヒエラポリスとコロサイとコリントは七つの中に入っていない。19章です。

8 **ここにパウロ会堂に入りて、三个月のあいだ臆せずして神の国に就きて論じ、かつ勧めたり。**

パウロは、「論ずる」ことが好きなんだね。大分、ギリシヤ的なところがありますから。ギリシヤ人は、論ずることが好きだ。論議倒れといいますね。しかし、パウロは、論ずるばかりでなく、非常に実行しました。

9 **然るに或者ども頑固になりて従わず、会衆の前に神の道を譏りたれば、パウロ彼らを離れ、弟子たちをも退かしめ、日毎にツラノの講堂にて論ず。**

「ツラノ」とは、哲学や何かを一般に文化的な講演をするような所らしいです。教会でないから、来る人はむしろ多いかも知れませんね。

宗教のことは、「論ずる」という言い方はあまり感心しないんですが、パウロが論ずるときには、もちろんその中に、告白的な要素が非常に強いと思いますが、

「について論ずる」

ことは、あまり感心しない。

「の中から告白する」

のでなくては。パウロはもちろん、その中から告白しているわけでしょうけれども。だから、力があります。「について論ずる」方は力がない。学者の世界は、「について論ずる」ことばっかりだ。

10 **斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。**

「二年間」とは、非常に長いです。小アジヤの一番の中心がエペソですから、小アジヤの東京みたいなものだ。さっき言った七つの教会が中心になって、これはみなそれぞれ都市ですから、

「七つの教会の連中がみな聞いた」

と言ってもいいくらいです。ユダヤ人もギリシヤ人もね。パウロは、非常にあちらこちらに出掛けて行っては、話しているわけです。第一回の伝道で行った中心がガラテヤです。東も西も、どっちも、しゃべってしまった。だから、小アジヤ全体だ。北の方は都らしい都がない。だから、第一回と第二回で小アジヤ伝道を全部やってしまったんだ。大変なものだ。

●使徒的信交

11 **而して神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。**

彼は言葉と力とが並行している。このことはコリント後書12章に出ている。

「我は徴と不思議と能力ある業とを行い、大いなる忍耐を用いて汝等のうちに使徒の徴をなせり。」（コリント後書12・12）

これが使徒の徴なんです。福音を言葉で伝えると同時に、力でもって業を現していく。これが使徒の徴。我々クリスチャンもその徴を持たなければダメなんだ。聖霊を受けた人はこれができるわけだが、聖霊がないと、これができない。

内村先生は素晴らしい人だけれども、その力を持ってない。これ、聖霊以前のこと。聖霊がない、とは言いませんけれども、無教会はその力を持たなかった。内村、藤井は、大変な先輩ですけれども。そこで、手島君と私が聖霊を受けたら、今度は、

「無教会とは違ってしまった」

と言って、追い出された。

まぁこの頃は、皆さんはちゃんと治まった世界にいらっしゃるからだけれども、あまりそうでない時には、随分いろんな事が起きたからね、徴と不思議が。もう昔は大変でしたよ。他の霊に憑かれたり、追い出したり、泡を吹いて倒れたり。

大変なクリスマスがあった。杖をついて来た人が、帰りには杖が要らなくなってしまったり、素晴らしい美わしい幻を見たり、天の音楽を聞いたり。

とにかく、使徒たちはみんな、使徒たちの信仰の次元は、キリストと一つになっている次元ですからね、本当に。だから、力が来るんです。

「信仰」

なんていって仰いでばかりいたんじゃ、ダメなんだ。交わる世界に入らないと。一つにならないと。一如の現実が使徒的信交です。

「御霊を持たざる者はクリスチャンに非ず」

なんて、パウロははっきり言っているんだから。

悪霊も力を持っているから、間違わないようにしてくださいよ。しかし、サタンになめられてはいかんです、絶対に。キリストにあっては、サタンになめられませんから。キリストにおける、聖霊における権威ははっきり持たないと。

「自分は聖霊でだいぶ強くなった」

と、そんなことを思う必要は、ひとつもないですよ。からっぽでいい。からっぽの所に、本当に聖霊が働くんだから。

●御意に従う

「御意」というのは、深く祈り入ると、感じます。そして、御意は必ず従わなくてはいかん。従っていると、それに従って何かやっていると、

「これが御意であるかないか」

ということが、やっているうちに分かる。御意でないと、やっているうちに、それが行きつまる、ダメになる。本当に御意に従っていれば、やっているうちに、非常にそれが力強く展開していきます。そして、はじめて本当に御意に従っていることが分かる。頭で分か

るんじゃない、行為で分かるんです。
私は、今、詩を書いていてはっきりそれが分かる。これは本当に御意に従っている世界だ、ということがね。
もう、ダンテやゲーテの詩より長くなるです。はっきり分かっている。詩としてはかなわないよ、あの大詩人には。
「かなわないけれども、内容的には〔かなう〕」
ということです。ダンテやゲーテを読むと、全く驚嘆するよ、どうしてこんなに詩が書けるかと思ってね。型が違うですよ、ダンテとゲーテは。ゲーテは円形、ダンテは三角形。ホーマーは素晴らしいけれども、福音的な素晴らしい内容からいうと、ホーマーは低いからね、何といっても。詩としては素晴らしくても。それはもうダンテとゲーテです。ミルトンも、ある意味においては、入るです。大変な人だよな、盲であれだけの詩を書いてしまうんだから。ミルトンは、大学を卒業して5年間、古典の勉強をうんとやった。ギリシヤ、ラテンを読み尽くすくらい。
私は、大学を卒業して就職したら、藤井先生が、
「なんだ、すぐ就職したか」
なんて言ったけれども、それは、就職しなければ生きていけなかったから、したんだ。余裕があれば、若い人は、できるだけ勉強した方がいい。藤井先生は内村先生に、
「私も先生のように伝道したいんです」
と言ったら、内村先生に、
「しばらく役所に勤めて、世の中を知ってから、やりなさい。10年くらい、まずやってからだ」
と言われた。官吏の世界はゆがんでいるものだから、やりきれない。10年なんかもたない。2、3年でやめてしまった。だから、内村先生や藤井先生が、今の世の中を見たら、もう愛想をつかしてしまう。内村先生はあの時代でも、
「もう日本には愛想をつかした」
と言った。藤井先生は憤慨して、
「滅びよ。こんな国は滅びたほうがいい」
と言った。それくらいの気迫を持たなければダメなんですよね。
皆さんも、サタンにはなめられないように。毅然（きぜん）としていてください。サタンになんか、うっかり親切なんか尽くしてはダメですよ。なおさら、なめられてしまうから。

●キリストの聖力によって

そこで、パウロはキリストの聖力によって証したわけです。力ある業を、神は行い給う。主格は神さまで、パウロがやったわけではない。我々は使われるだけ。だから、12節に書

いてあるでしょ。

12 即ち人々かれの身よりあるいは手拭(てぬぐい)あるいは前垂(まえだれ)をとりて病める者に著(つ)くれば、病は去り悪霊は出でたり。

凄いね。キリストと同じことになった。ペテロもやりましたよ。使徒行伝5章12節から16節のところに、

「12 使徒たちの手により多くの徴と不思議と民の中に行われたり。彼等はみな心を一つにして、ソロモンの廊にあり。13 他の者どもは敢て近づかず、民は彼らを崇(あが)めたり。14 信ずるもの男女とも増々おおく主に属(つ)けり。15 終(つい)には人々、病める者を大路にかききたり、寝台または床の上におく。此等のうち誰にもせよ、ペテロの過ぎん時、その影になりと庇(おお)われんとてなり。」（使徒5・12～15）

ペテロの影に入ったら、それでもって治ってしまう、と。もう、キリストの霊波が身辺に漂っているんだよな。法然でも親鸞でも、仏教の世界でも一流の坊さんになると、そういう境地になっている。

賀川豊彦なんかもそうだね。本当に愛の人だ。日本の伝道者で、どん底の生活をして伝道した第一人者は賀川豊彦です。内村先生も、無教会の人はむしろ知識階級ですからね。福音の本当の世界は、やっぱり賀川豊彦だね。これはもう第一人者だ。貧民窟の中に入って彼は生活したんだから。それはもう、祈りが呼吸みたいになっていないとね、こういう世界は。

「さぁ、祈りましょう」

ではないんだよ。黙っていても、もう祈りの世界だ。

病は去り、悪霊は逃げてしまう。マルチン・ルターも、

「クロイツ！」（十字架！）

とか、

「クリストス！」（キリスト！）

とか叫ぶと、サタンは逃げていくと言っている。

「聖言の一言、サタンを倒す」

という言葉が、ルターの讃美歌の中にあります。

まぁ、私も、按手で何人の人を助けたか分からんよ、正直。ペニシリン以前に肺病患者というのは大体死ぬことになっていたが、それが助かってしまったからな、按手すれば。ここは按手どころじゃない。その影に立てば、治ってしまうと。大変なもんだ。

13 ここに諸国遍歴の呪文師(じゅもんし)なるユダヤ人数人あり、試みに悪霊に憑(つ)かれたる者に対して、主イエスの名を呼びて『われパウロの宣(の)ぶるイエスによりて、汝らに命ず』と言えり。14 斯なせる者の中に、ユダヤの祭司長スケワの七人

の子もありき。

キリストを信じないで、名を借りたんだ。冗談じゃない。

15 **悪霊こたえて言う『われイエスを知り、又パウロを知る。然れど汝らは誰ぞ』**

悪霊の方が分かっている。悪霊に見破られてしまった。霊の世界はそうなんですよ。霊は霊を知る。いくらインテリの人でも、キリストのことが分からない。悪霊が分かるんだ、神の子だと。マルコ伝5章に書いてある。一番先にキリストのことを「神の子」と言ったのは悪霊なんです。

16 **斯て悪霊の入りたる人、かれらに跳びかかりて二人に勝ち、これを打拉ぎ**
たれば、彼ら裸体になり傷を受けて其の家を逃げ出でたり。

とんでもない。キリストの聖名を借りて、そんなことをやったら、悪霊にやっつけられてしまった。

17 **此の事エペソに住む凡てのユダヤ人とギリシヤ人とに知りたれば、懼彼ら**
一同のあいだに生じ、主イエスの名崇められる。

主イエスは、そんな偽り者、借り物の味方ではないぞ、というわけだ。

18 **信者となりし者おおく来り、懺悔して自らの行為を告ぐ。**

これはもう、聖名は、いい加減には称えることができないということが分かったわけです。

「聖名を妄りにあぐべからず」

とある。祈りの中で、

「主さま、主さま」

と、余り繰り返さない方がいい。祈りが途切れると、途切れのついでに「主さま」と言う。途切れに言ったってダメだよ。「主さま」と言う時には全身でもって言わなければ。

19 **また魔術を行いし多くの者ども、その書物を持ちきたり、衆人の前にて焚**
きたるが、其の価を算うれば銀五万ほどとなりき。

とにかく、非常にこれは悔い改めたね。みんな焼いてしまった。

20 **主の言、大いに弘りて権力を得しこと斯の如し。**

真理はそれ自身、本当の実力ある真理はそれ自身が立っていくから、弁護する必要がないんです。福音はそれみずからの力で動いていく。歴史を変化していく。

「福音を伝える人がいなければ、石が叫ぶ」

と、キリストが言われた。凄いね、ああいう言葉は、「石が叫ぶ」と言う。

こういう所を読んでいると、力が来て困るね、私は。もう、聖書を読むだけで力が来なくては。おかしな状態はみんな治ってしまう。

●大女神アルテミス

21 **此等の事のありし後パウロ、マケドニヤ、アカヤを経てエルサレムに往**

かんと心を決めて言う『われ彼処に到りてのち必ずロマをも見るべし』22斯て己に事うる者の中にてテモテとエラストとの二人をマケドニヤに遣し、自己はアジヤに暫く留まる。

23**その頃この道に就きて一方ならぬ騒擾おこれり。**

「この道」というのは、キリストの道のことです。福音のこと。

24**デメテリオと云う銀細工人ありしが、アルテミスの銀の小宮を造りて細工人らに多くの業を得させたり。**

エペソには、アルテミスの像があるんだな。ギリシヤ神話というのは、いろんな内容を持っていて、困るんですよ。どれが本当だか分からない。ギリシヤ神話くらい奇々怪々なものはないね。しかも、ギリシヤ神話というのは、いろんなことで、向こうの文学を読むと、出てきます。神話の字引を見ると、「アルテミス」も、オリンポスの十二の神さまの一人で、狩猟と弓の神さま。同時に、野性の動物や子供たちや弱い者を守る女神。ニンフ――小人みたいなものだ――それを連れて山野を駆け回る。きれいな乙女の神さま、処女神。貞潔の象徴である。純潔を守るという。人間の男女の純潔や貞操を守る神さま。それが「アルテミス」。悪くはないんだ、この神さまは。

ところが、もうひとつの説には、エペソにもう少し前からいた氏神みたいな神さまがいるんだ。それは、アルテミスはたくさんの乳房を持っている。多産の神さまで、植物でいうと、多くの収穫ができるというようなわけで。だから、子供たちを守る神さまである。ゼウスとウェトーの娘で、アポロンと双生児だという。アポロンも有名な女の神だからね。まぁ、どっちでもいいです。要するに、そういうのがアルテミスという女神です。

25**それらの者および同じ類の職業者を集めて言う『人々よ、われらが此の業に頼りて利益を得ることは、汝らの知る所なり。26然るに、かのパウロは手にて造れる物は神にあらずと云いて、唯にエペソのみならず、殆ど全アジヤにわたり、多くの人々を説き勧めて惑したり、これ亦なんじらの見聞する所なり。27斯てはただに我らの職業の軽しめらるる恐れあるのみならず、また大女神アルテミスの宮も蔑せられ、全アジヤ、全世界のおがむ大女神の稜威も滅ぶるに至らん』**

●本ものか

宗教の世界は、

「あれが、本ものだ、うそだ」

と、一生懸命に

「これでなければいかん」

と言って、喧嘩する。今の、イスラエルとアラブ、結局あれは宗教的な争いです、要する

によってきたるところは。いつまでたっても始まらない。ユダヤ教がまた頑固で、イスラエルは、キリストを受けとらないからね。十字架に、今でもつけっぱなしです。だから、宗教の世界は、

「あいつは間違っている」

と言って喧嘩することはないんです、本当は。本当のことを告白していれば、それを聞いて、

「あっ、これは本ものだ」

と。そうでない方は、人がきかない。そうやって、淘汰されていく。それが本当の世界です。商業だって、そうでしょ。「この酒はいい。他の酒はダメだ」と言ったら、そういう広告は成り立たない。「酒は○○に限る」というのは。他の酒のことを言ったらダメなんです。自分のことを言っていればいい。だから、広告を見たって、そうでしょ。他のことの悪口はひとつも言わない。

「酒は○○」

と言って、それが広告なんだよな。宗教も、そういう広告と同じでいい。ところが、宗教の世界は、他を悪く言うから、喧嘩になる。どっちがいいかわるいかは、聞く人がみずから判断すればいいんだ。

キリスト教の外国の宣教師が、仏教の仏像をすぐ「偶像」というようなことを言う。ああいう言い方はいかんです、魂を込めて造ったものを。単なる「偶像」ではない。それはひとつの象徴なんだからね。キリストの絵を書いたって、キリストの像を造ったって、

「では、カトリックは偶像か」

ということになってしまう。マリヤの像がたくさんある。それはひとつの徴なんだからね。それをただ拝んでばかりいても、それは困るけれども。霊の世界だから。ローマン・カトリックとギリシヤ・カトリックの争いも、そこから来たでしょ。「偶像を建てた、建てない」でもってね。問題は、これを受けとる人が、

「本当に受けとっているか、本ものか」

ということだけ。これは、客観的にはお互いに評価できない。自分でもってその世界にいるだけだ。本ものでなければ、段々ダメになる。本ものなら、必ずダメにならない。事実が証明するだけです。

宗教戦争なんて大間違いだ、カトリックとプロテスタントの宗教戦争、三十年戦争なんて、とんでもない。今でも、アイルランドなんて、やっているね、プロテスタントとカトリックの戦争を。あれはダメだ、ああいうのは。

「ああ、そうですか」

と、それでいいんだ。本ものは、花が咲き実が稔る。ウソものは花が咲かない、実が稔らない。それだけのはなし。キリストが言ったでしょ。毒麦とそうでない麦とが生えてきて、

「すぐ、刈りましょう」

「いやいや、ほっとけ。今に、それが分かる時が来るぞ」
と。だから、私は仏教の人に、
「キリスト教になれ」
なんて絶対に言わない。
「どうぞ、そちらの世界で本ものになってください」
と言う。それだけのはなし。
ある仏教の坊さんが――少しいかがわしい坊さんだな――賀川豊彦の伝道ぶりを見て、
「参った！」と。それで降参してキリスト教に変わった。事実です。そういう世界ですよね。
だから、
「大女神は、ああ結構です。大女神を拝んでいるなら、拝んでなさい」
と。ただし、パウロは自分の信仰を告白している。
「いやぁ、パウロさんにはかなわない。あれが本当だ」
と、変わっていけばいいんだ。
「そんなアルテミスなんか拝むな」
なんてやったら、それは喧嘩になる。向こうが尋ねてきたら、いくらでも話してやる。こっちから、わざわざ
「それは間違っている」
なんて言う必要はない。『ものみの塔』なんてやってくるよ。
「ああ、そうですか。私は私でやってます。私はちゃんとこちらで伝道してますから」
と言うと、逃げていくよ。争わない。私は「ものみの塔は間違っている」なんて言いません。しかし、彼らは熱心だよ、伝道は。あなた方はやってるかい。とにかく、機があれば、証することはしなくてはダメです。この福音を、ただ沈黙していたらダメです。告白的な証をしていかないと。相手が受けとるか、受けとらないかは、それは相手のはなしだ。
「受けとらないから私の伝道はダメだ」
と、そんなことを思う必要はひとつもない。証をしないことが悪い。
「語らざるを得ない、やむをえざるなり」
と、パウロが言っている。
「証しせざるを得ない」
と。太陽の光を受けとれば、水滴は虹にならざるを得ないように。

●他宗排撃はいかん

28彼等これを聞きて憤恚（いきどおり）に満たされ、叫びて言う『大いなる哉、エペソ人のアルテミス』29斯て町挙（こぞ）りて騒ぎ立ち、人々パウロの同行者なるマケドニヤ人ガイオとアリスタルコとを捕え、心を一つにして劇場に押入りたり。

こういうことをするわけだ。賀川豊彦も伝道していたら、しょうがない野郎が「なんだ、お前は」なんてやってきて、ヘタするともうちょっとで殺されそうになったことがある。

30パウロ集民のなかに入らんと為たれど、弟子たち許さず。31又アジヤの祭の司のうちの或者どもも彼と親しかりしかば、人を遣して劇場に入らぬようにと勧めたり。

パウロは恐れないけれども、まだ生命を捨てるには早すぎるというわけだ。

32ここに会衆おおいに乱れ、大方はその何のために集りたるかを知らずして、或者はこの事を、或者はかの事を叫びたり。

もうゴタゴタしているわけだ。昔も今も同じだね。

33遂に群衆の或者ども、ユダヤ人の推し出したるアレキサンデルに勧めたれば、かれ手を揺して集民に弁明をなさんとすれど、34其のユダヤ人たるを知り、みな同音に『おおいなる哉、エペソ人のアルテミス』と呼ばわりて二時間ばかりに及ぶ。

反対運動をやってるわけだ。

35時に書記役、群衆を鎮めおきて言う『さてエペソ人よ、誰かエペソの町が大女神アルテミス及び天より降りし像の宮守なることを知らざる者あらんや。36これは言い消し難いことなれば、汝ら静かなるべし、妄なる事を為すべからず。

分かっているね、この人は。

37この人々は宮の物を盗む者にもあらず、我らの女神を謗る者にもあらず、

パウロは別に謗ってはいない。パウロはキリストを称えているだけで、「アルテミスは間違っている」なんて言っているんじゃない。

然るに汝ら之を曳き来れり。38もしデメテリオ及び偕における細工人ら、人に就きて訴うるべき事あらば、裁判の日あり、かつ司あり、彼等おのおの訴うべし。39もし又ほかの事につきて議する所あらば正式の議会にて決すべし。40我ら今日の騒擾につきては何の理由もなきにより咎を受くる恐れあり。この会合につきて言いひらくこと能わねばなり』41斯く言いて集会を散じたり。

立派な男だね、これは。その通り。

日蓮が他宗を排撃した。あれは確かによくない。日蓮自身は凄いけれども、他宗を排撃してはいかん。全部あれ悪口言っていた。今、創価学会と日蓮本宗とがゴタゴタやっている。創価学会は創価学会でいいよ。あの人たちの生活態度はなかなか立派なところがある。

●愛の使徒賀川豊彦

御霊の世界は、力を持っていると同時に、また、非常に認識がいいです。私心がないから。

太陽の光で見ているようにね。そういう認識の世界でも、聖霊は素晴らしいものを持っています。私は、聖霊を、「力」ばっかり言ってませんよ。日常生活においてもそうなんです。とにかく、御霊というのは素晴らしい内容を持っている。だから、いろんなものが見えてくる。そして、正しく認識ができる。評価すべきものは、ちゃんと評価する。

狂信的でないです、聖霊の世界は。狂信的なのは困るよな。自分ばっかりいいとして、後はダメだと。それはパリサイになる。ヘタすると、無教会も非常にパリサイ的な面があったからね、今はどうだか知らんけれども。

「教会の在り方は間違っている」

と、ひとの悪口言ってはダメだよ。

教会組織というものは、カトリックの組織というものは、これは、宗教の本来のすがたではないから、ご苦労さんな話なんだ。何も、悪口を言うことはない。我々のは「組織」じゃない。これは「有機体」です。生命体。我々の交わりは生命体でなくてはいかん。生命体の本質は愛です。愛のない生命は生命でない。

サタンとの戦いなら、絶対に負けないです、キリストの力だから。まぁ、何とも不思議でしょうがないね、この聖霊の世界は。無教会時代には、そんなことは分からなかったね。御霊を受けてから、何とこれは素晴らしい世界だろうと。

私は行動的な伝道者でないから、詩の上で告白するしか仕方がないけれども、さっきから言っている通り、行動的な伝道者としては、賀川豊彦が第一人者です。本当に素晴らしい。社会改善もやったしね。あの人はもの凄く勉強したんだよ。いつ勉強したかと思うくらいに。非常に博覧強記で、私は一遍、講演を聞いたけれども、とにかく、空んじているんだ、いろんな数字を。自然科学の方も深いし、精神科学の方も。大変な人です。それで、どん底の実践家でね。私は賀川豊彦のことを

「愛の使徒」

と言います。本当に使徒的な信交を地でいった人です。アッシジのフランシスもそうだったけれども。古いところではフランシスだろうな。また、フランシスというのは大変な人だ。もちろん、私の詩の中に出てきますよ。今、詩を書いている時には、霊の翼で私は走っているからね、一番、楽しい。

では、この辺にしましょうか。讃美歌は、大いに歌うといい。自分一人でも。私は夜遅く――大きな声で歌うと、近所迷惑になるから――小さな声で口ずさんでいる。讃美歌を一つ歌ってから、祈ろう。それから、また歌う。歌うことは、讃美であると同時に祈りでもある。ただ、歌うために歌っているんじゃない。